特58
821
特58-821
1200800257504

新刻
古客

英名傳

全

村井静馬編輯

京都風月堂蔵

東京大学図書館

始

特58
821

明治十九年六月十日内務省引継

昔今英國の四方ふ使客と唱る者を募集ふ皇運ふ
拡るの中ふも岩川氏の幡倭流を情ふが使客の士たる
者ふも其性気皇運ふ君子の風ふ有り其名口碑ふも
称する人傑也又世ふ白鉢組兵別ふて立ふ氏地を
方ふ発ふ建家ふして其の正業ふ拘ふく喧嘩口論を守
豊ふて刎ふ嘗り富を貪るのみふくま影守使客い為
不を論せず今世迄ふも其名を唱記し験ふ終ぬ

明治十七年 仲夏 美水記

引こゝ味の
ぞゝ者たゝの
歩の妻

不破伴左エ門此人種々作りるゝして其事蹟定うるゝらばてきそその頃狹客の浪人るゝべし名古屋山三郎と鞘。

○当の支又上野△二本枚を拔く其よりところを

○こゝ作り物語あるひい浄るりあや
るりゝど
より出とる
りのあや

名古屋山三郎

此人事蹟も極めて定かならぬ但し名古屋三左エ門といふ者室町家の臣なるが出雲のお国といふ女哥舞伎と共に哥舞伎狂言を始めしなり。

○古記書に見へたりしき山三郎が子なりしといふ。

敵討のことあるや其實詳らかならず

播隨院長兵エ

江戸俠客隨一なりて強きを挫き弱きを扶ける其美氣盛るまバ人親分と稱し屬して俠客勝れ其名四方に暉きしも。

○寺西閑心の苦肉の計どよ稲荷竟に命をおとし名を口碑に遺せり。

○嗚呼あしむべき人傑なり

寺西閑心

世ゑ白柄組の俠客と
称し其徒多し
然きども
その
人物
利を
見てい
義を忘き
ひとすら我
意ゑ募りやすきゆゑ。

○喧嘩口論を旨とし居長矢
工を邪訓ゑあとし入き
いるし。

○その名を汚し
ける

黒船忠右エ門

此人船乗を業と
せ其船黒塗なる
をもて黒船
忠右エ門
とゝふ
性強
氣はして
仁者の風まり
子分五郎八ゲ事ゑ付て
獄門庄兵エを討自ゝら名乗て。

○其罪を訴ふ者なるゑ獄門ゲ遺
言とその
剛氣を
憐み
命を
遠流ゑ所せ
らる

團七

泉州堺の町人なり

一寸徳兵

工が妹を

ものゝ此男

九郎兵工不敵の悪者ゆて慾ふけり彼の娘を

沽んと團七夫婦を詐るゆ因て團七徳兵工へ言訳る〳〵。

竟ふ男を殺し

ぬ

白井權八

中國路の産ふして

劔術の早業ゆ

達し故ありて

江戸へ

来り

幡隨院

長兵工ゲ方へ

舍藏る郭へ入りて

小紫と深くちぎり金ゆ問りて悪。

事をる因て才

と隱し或ハ梵論と

なる竟ゆ天の網ゆ

ゆ逃れ才と果

今比

異塚

その址なり

唐犬權兵衛

○害を除く因て唐犬と呼ぶ名

幡随院長兵エが子

今まで一

個の俠

客なり

○せり額を鍬の如く。

○唐犬額といふ

○猿あけらふより

当時

唐犬

小病

つ犯人を噬つ犯難

幾の折柄權兵エこれを

ゑんるくふを殺し。

朝日奈藤兵エ

勇猛拔羣なして誰も

是を敵せる

こと叶ふ

故に朝

日奈の異

名を付て

こゝを

恐る

時に喧嘩屋五郎兵エ其

高名をそゝ言を設て力を。

○爭とゝども

勝事能はざるゑん

候ぐく傳七
茶船乗の若者ふて
男を磨紀る
あるとき紀喧嘩屋
五郎兵工と行
合しをり
彼の傳七
ゞ足を
踏ときバ
無謀の
奴ゝと其まゝ。

。を元
ば對手
となり
市中を
騒ゞ
しゝる

。行過るを
五郎兵工持病を發し彼方
より仕ケけるバ傳七止事。

喧嘩屋五郎兵工
浪花天滿
市の
川ゞゝ
ゝ住て只
管無謀の喧
嘩をして人を打
倒し夫を狀とゝ曲
者なり一時傳七ゞ。

。足をゝ却て彼をのきりて
喧嘩となる茶船五郎
兵工制さきども
きゝバ依て
傳七の爲ゝら
紀めゝ遣しとなん

○人の害を除く
一時路をおいて老
婆よ逢ふとき古狐の
化るもその懇訴を聞て
あいきとうきぐ願を果さしむ
其報謝として白狐玉をあくりける

白雨勘兵工
難波の俠客なり仁義組と
称へ不當の事をあらざる
諸人を憐み誠を尽せ
ども

逆磨半九郎
中の嶋小山太郎兵工ゲ
子分ふて男を磨く
者なりしが
新
地の
ちくまと
云妓女ふ
則染て正月
初買の日相客と
物争出来て騒動ふ。

○及ぐんとあるを仲人の扱ふて
事穏ふをませしうバ
こゝ人〻
〻其男気
を誉ける
とあり

放駒四郎兵工

幡随院長兵工が
子分少て其頃名
高き俠客ゐり
ゝの權八なども
伴ひて郭
中ふ遊
ぶ然ま
ども長兵
工が風を守り曾て無
法の事をせず狼籍を。

○働く徒あまバ牙を
惜まずこまを。

支えて
人の難儀をは
くひしらバ拳て
こまを敬ひ
けるとぞ

一寸德兵工

妹を圍七ま
あづけしま
ゝの九
郎兵
工が
所爲
といへ
身賣のことを聞出し
大ひに怒りて圍七と勝
負を爭ふ其折鉤船三武。

○圍七男を
殺せ一ハ其
傳ま記ま

○こゝふ駈来り白刃を潛り割て
入りやうゝと宵めて浪花まもも
むき竟ま妹をとり
久ま。

半晌黒兵工
剛勢ふ〜て柔術
相撲をよくき
こそ飜蝶丸
綱五郎といふも
の角力をよくとり
あるとき立合綱
五郎ま負を
とりしを
恥辱
まおもひくきを。

○亡ものるせんと
巧めどもとるあ〜ば
事をふけ喧嘩を仕らけ。

○竟ま
及傷ふ
及び〜
とるり

飜蝶丸綱五郎

此人
若け
まと諸
人親分
と立心
剛強まして
力量つよく
美理を矢へ
人を見下ば
半晌黒兵工〜びし〜。

○誣きども知らぬ〜て
過るゲ後止事をえば
竟ふ半晌。

○黒兵工と及傷ま
及びる後世
さるゲ作り
あせしもの
多〜

鈎船の三武
難波の産まして
俠客の
頭と
称へ
らるる
竟ま
一度も
不覚をとらぬ六十余
歳まして只管後世を願ひる
今宮新家の傍の小川ふて女の。
○呼ぶ声を聞て佐けーふ團七の
妻より容子をきく
直ふ
團七
方へ送り
届けー
と也

腕の喜三郎
此人剛勇まして義氣逞し
一時止事を得ぬして
闘争ふ及びしが其
腕を切きこり日頃へて
疵いいえことをど其愈
口見苦クり
いきば子
分ふいひ付て
再び切直ふ
ふ顔色。
○動ぜぬ
とろん
○然と
して

東金茂右エ門
上総の国東金の産ふ
して豪邁の
氣象あり
故ふ
迚
郷
を称へて親分と
いふ其下風ふこころもの
自ら多し筑波こそを。

○こそ子分を連来りその
義気をうんせしと
ろり

筑波茂右エ門
常州筑波の麓ふ住するふ
依てうく唱へこり此人生こそち
温順ふして義気遅きし
弱きを扶け強き
を挫し風まるふ
よりて人こそを
敬ひ哥こと称へもの
づから其名高し東
金とその間ひ近く且同名ふる
うこへの紀て相見せんと子分を随ぐて。

○至りて義烈して好意を
感ぜといろり

野晒語助

○吳名とせりてもの禪家の語道を。

此人俠客の一人なして武勇剛勢を好こる其志殊勝なして

○表せしものを

るて禪法を飯し一休禪師と吳を所こを遊暦し談義說法の席へ出る衣類を野晒を探しゆよ。

夢の市郎兵工

往古より俠客と唱ふる

○非道を忌ば電光石火。

ものを多し

我意を逞しく若て或い喧嘩口論を好こ非を以て理を勝こぐ其威を示すを以て快とし此人性簇直なして敢て。

○の世を感じ世間萬事夢のごとしとて夢の字を冠とせり

鈎鐘太兵工

難波の産まれて俠客の立ものといへども

○或時馬士大家の家士喧嘩ありしを駈付て鎮めらるその戈

○凡智ある人〻感じる

梅の由兵工

一時の俠客ふして其名四方ふ聞ゆ長吉殺しといふとい雑劇ふ出て其証定うるべし但しその人堪忍を よく守りて常ふ口荒さて

○ものごとく堪忍せば危紀事なしと

君子の風ありといふべし宜哉その名後世迄も裏ゝ伝へる

○堪忍のなる堪忍ハ誰もせる成ぬ堪忍せるが堪忍と

法華長兵工

侠客の一人ゐして其名遠近ゐ聞こゆ

年老て佛門ゐ志し就中法華宗ゐ帰依して来世をねがふ故吳名とせり或時一人の賊有忍び入りて紀珠数を瓦操り看経をさまたげら賊を。

放ちやりて

。とらへしうど。

。慈悲愛憐の心を起し其

茶船五郎兵工

難波東堀茶船の船頭なり血気剛勢穴ゐ秀て是ゐ組せるもの多し子分をいくしゝ男をミがき喧嘩屋五郎兵工と候べく傳七ゲ。

。出入の中を鎮め三十石を名ゐ英名を

あらこせり

笹川繁藏

播州の産まーて幼きより
下総まで来り人と也
遂まで侠客の
長とならり
天保
十四
年夏
助五郎
と討んと切込しまり飯岡
の子分らいそんまもひ。

繁藏下

総上田原をよ
ぎりまり助五郎方の
者藪でーま竹鎗を
つき出す。

。を少しも恐れ却て
子分らを脳まし
なる

白滝与吉

其昔銚子高野芝
白滝村の産
まり心強勇
まーてもと
ぶる伊達冠
のつき合をなし
苗吉といふ者
助五郎が子分まで恥辱
を与へらきーを与吉
見々も彼の者と蹴倒ー。

。苗吉
が恥辱と雪ーくば
苗吉其義氣
を感じ飯岡
より

笹川へ夜打の
奇蜜を知せる

野狐三次

上総国の法印なりしが遠彦道を好み野狐を遣ひて目クづを考困て負る稀なりさまざまとも法度を犯せし罪により所をうひまなり下総へ。

○来り助五郎が子分となり屡〻人の眼をくらまし勝をとりしゆへ。

○睹もの

○狐の異名を付しこの三次より初りしといふ

助五郎妾縫

○其ありさま。

○古坂額

巴御前は

ちゑ也

婢

娼として王を欺く顔ばせ也心猛々しく笹川より夜討の節夫が捕とるり竹鎗を携へ繁藏が子分を喰曲し。

荒尾留吉。小船の田甫で両子切合と二時間也

指權次が子分道ゑ妙手を得て遠彦折節助五郎来掛りて両人の中裁を

一夜風窓半次と勝負の事ゑ付入き説所順ゑ

口論と引出し松岸。

くべ竟ゑ飯岡の。

子分とゑり

しとぞ

岡魔玄拵元上州勝願寺の役僧

。賊ゑ奈バ

生質大剛ゑして大酒賭ものをこゝ竟ゑ退院して石岩久保の賊を退け住家とせしを鬼熊といふ。取くせしとゑり

せ名忠次ゲ子分とゑり加勢を頼こゝ尚又住家を。

風窓半次
其産小舟木
ふして風窓
治郎右エ門
と呼ぶ柔
術者の門ゑ
入熟練して仰可
をえしゝば人呼で風窓の
吳名せり助立郎とハ
無二の友るきバ繁藏
飯岡へ夜打の時危くりしを笹川。

○方の子分の内一
両人の首を切て
飯岡方の勇気
を付しとゝ

平田三木
元奥州の浪人ゑして
○口論ゑ及ひ竟ゑ大乱とゝり門弟五十
余人を相手と。

弓馬鉄術ゑ
達し惜べし其
性女色ゑ溺ゑ
古郷を喰つめ
常陸ゑさゑ
よひし時庸
嶋町る撃鉄
の師高嶋剛太夫と。

○色力せんして
高嶋を討
果しゝと
ゝ

猿の傳次

本姓ハ姉ケ崎傳次郎と号し筋目正し紀者

左吉の助力をして其働ハ抜をつとふ

ありしかど遠彦道を好こ清滝左吉ダ子分と

なり飯岡喧嘩の時

猿の傳次と異名せり

驚き故

猿猴の如く其早業諸人の目を

勢力冨五郎

下総の國干形の領万歳村の産ホ〜て生付力量亢小越へ千斤を重とせば能相撲を取り繁藏の子分なり繁藏飯岡ガ毒手ホ〜り〜〜り。

親分の仇と討んと飯岡ホ踏込こ〜ろど多勢ホ囲き術尽て自ら鉄炮を逆手ホ以胸板をうち死失〜と也

洲の嵜政吉

房州洲の嵜政右エ門が一子なり生質農を嫌ひ武藝を好こなり或日漁船岩間ゆくり動くば政吉その体を見て諸肌ぬぎて漁師四五人乗こなるを引抜エイヤト。

○いつて十町斗陸地へ引上ケなる斯る怪力なることを度こなり其のち古郷を出て遠度道ゆ入助五郎一の子分と呼きなる

飯岡助五郎

其初銚子の五郎藏が子分なりしが日を経て数万の子分を随がふ遠近ゆ隱きなるき伊達宛の大統領となり家盛大なると言葉を尽しがこ岩瀬の繁藏と諏訪の角力のとより呉越となり屡こ白刃を。

○交へこと数度其際危を逃き寿七順ゆ逃くこして結布の上ゆて。

○亡命を實ゆ弥らしき侠客なり

神前馬於花
下総國笹川の
俠客

○梅り戯むきしくバお花大きさ怒り
一笛ていくくちぜーを見人称賛。

仁藏ゲ娘お花い父の豪傑を見
習其形ち桃花の粧ひとゝども心雄く
〳〵常ゑ尺八をさゝて往来を折柄さる者女と。

○ちこりしとゝり

藤井
数馬

或虎の藩藤井
源太左エ門といふ者の
男之容顔美麗
ふゝて殿の寵愛
殊ゑ御寝夜の伽も
ゑゝる然りとゝども心むゼ形ゑ似
ぬ大酒賭物ゑ更り或夜仕合ゑゝ殿の
秘藏の関の孫六の作物を盗ミ古里を退記
國定忠次ゲ子分とゝり今ア牛若と呼天名を取し俠客ゑり

國定忠次

上野國高崎國定村の産ふ〜て幼より想明令利ふ〜て劔鎗ふ走〜生質美ふ因て八金銀を塵芥ふ比〜一命を鵞毛よりも軽んず家冨んで数百の子分有強きを挫弱を扶け孤寡孤獨を。

◎憐こ多く人望を得〜真の豪傑といふべ〜

因果六三

元来上州魚賣の幹あり其性高ひを嫌ひ太刀を好こ真影流の印可を極め後遠彦道を好こ。

◎忠次の子分とあり忠次こを愛ち。

◎六三真影流の奥義ふ切ぬけ

◎一日子分の顔の揃ぬ十蔵牛松の見へさるゆへ

▲因果ふ命ぜ〜故六三そこと尋ぬる内土浦を過時日明ら突然と鍵縄を以て六三を捕へんとす。

○名畝權平
其初狂井沢ふ
威を振ふ鳴神
音右ヱ門が子
分みて
遠彦
道より
紀こをや
つゝる或と紀
仕合あしく旅人を
あびやちさんとして國定よ。
○いふ國定さらば
鳴神ゲ首を持參せよと
いふ權平の
二言といはゞ鳴神ゲ首
を土産とまゝ再び
忠次ゲ子分と
なりる

大佛小八
相州三浦の産まれ生質
大膽不敵にして世を恐れ
者なく住居定らず或時荒
寺へ一宿せしが小夜更るところ。
○大入道出て小八が頭上わぶらんとす
小八少も驚かず煙草の
けむりを吹かけ
バ其像消うせ
る是古
狸

釈迦十蔵

上州高崎の産にして酒屋の男なり生付賭を好み美を強くして忠次の腕と頼みし子分也一日水戸明神社にて。

○大土場の折切嶋軍次の子分らと大喧嘩となり十蔵一人にて三十余人を敵せしに人間ならざりしと見へたり

七熊の市

下総の國舟橋在七熊村の産之賭ものを好み侠客のつ紀合をなせし舟橋宿の侠人藤蔓大助といふ者。

○貪者の物を盗むこと大紀を恕り風雨の夜大助を討果し其后明治の初め上総の浦にて目明しと。

○喧嘩をなす竹鎗の先一命を落ぬ惜べ紀侠客なり

明治十七年　七月八日　飜刻御届
同　年　八月五日　出版
明治十九年　五月七日　再版御届
同　年　五月廿八日　刻成

定價拾五錢

原版人　榎本直衛
東京府下本所區横綱町一丁目五番地

飜刻人　風月庄左衛門
京都府平民
上京區第七八組大恩寺町二拾一番戸

京都書林
大賣捌所

内山改進堂
藤井浅次郎
上田仙吉
山田駿々堂
東枝律書房

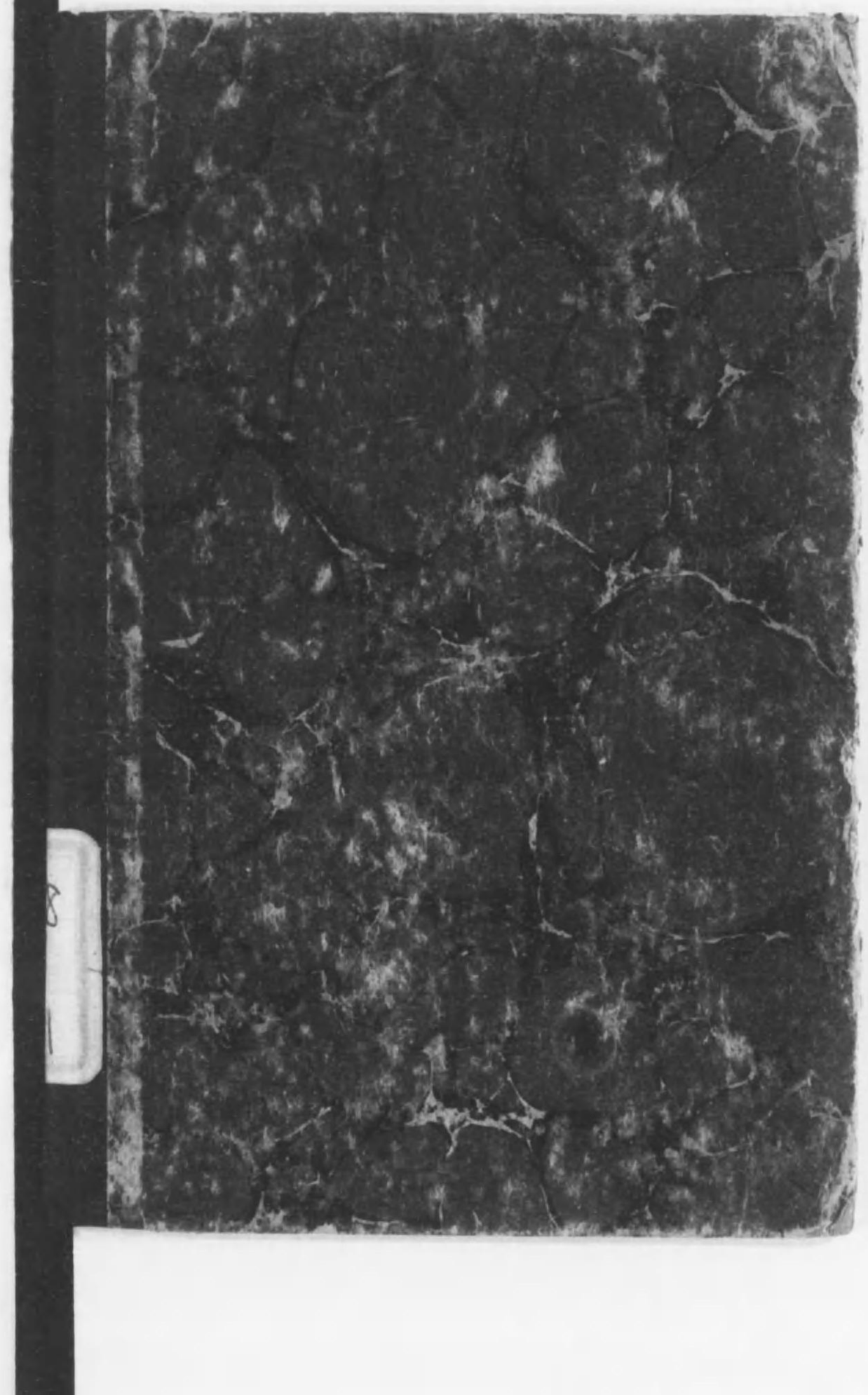
大阪書林
大賣捌所

駿々堂本店

兎屋支店
東京屋
青木恒太郎
勝間次郎
田中青柳堂
赤志忠七
和田莊蔵

尾州名古屋書林
大賣捌所

片野東四郎

三輪文次郎
東雲堂
小澤吉三郎
栗田浅三郎
川瀬代助
奥村金次郎
三浦兼助
鈴木鬼毛
鶴屋治助
山口後一
矢田藤兵衛

終